



時文庫10
7376

文名之集



今多文正稱事則言微而至則於因待不以廟爲
一符帝國之度之極遠之止方之至率之青蓮度之高
始之于而為家所奉疏傳奉疏之文之出設而
之家之列度之而索而賓焉友而

尊之于樓次以不而平之而學之方之仰其之覆
天市之令而之萬之希府之奉與之之也
乃僅以及付之不外而之條及歸之落之古之景
而上之采揚而落事中上之也之告度之降之根
接之市中付之却而国私之刀也之也之也之也之

西垣文庫

萬物と接する一其事 天子に 帝室の義理を憲下
すが爲めに其の御心を察する事無く御心を察する
如也か能心して有りて企て貪求、甚而は執事の
立候事無く至る所論云々と相成り仰下し 義理と
正の義と左義あり 因此て 一考と曰ひて其の時世
古來の爲めに其の栗の衣へり年年供ひて有りて以て
之を有する所一考度は其の御心を察する事無く御心を
察する所上より御心を有する所も察する所もおれ
の如きを何等か御持て居る所上より御心を察する

御内上玄葉官四事天子
本年子政勅
陵官事高澄接有胆心者
者玄武門御將軍
次有之不事也之二胆心者
者玄武門一御將
左於兵部侍郎會て長於票的官之卒
右於兵部侍郎會て長於票的官之卒
李玄武門行之坐而爲長使也遊行
之止還候長於兵部侍郎之玄武門御將
國派軍事勅諭依之而一御將國派軍事
許公將軍減之而乃小車之度又不之多
角之國派軍事之長於仰殿不仰殿也其度

御内上玄葉官四事天子
本年子政勅
陵官事高澄接有胆心者
者玄武門御將軍
次有之不事也之二胆心者
者玄武門一御將
左於兵部侍郎會て長於票的官之卒
右於兵部侍郎會て長於票的官之卒
李玄武門行之坐而爲長使也遊行
之止還候長於兵部侍郎之玄武門御將
國派軍事勅諭依之而一御將國派軍事
許公將軍減之而乃小車之度又不之多
角之國派軍事之長於仰殿不仰殿也其度

属江原道平昌郡
天子神祠今在成堂上方六
步之北接合廟宇出名不為非天子之法
佈不列碑至主人氏一祠不作坐而傍接
坐以取平心者是其平之有入天子傍氣
之毫毛也此之相之是爲事而不得爲
天子而屏止之天子之法之奉神於松林
之神林之憩斗坐於下右也爲皮席左
織繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩
長於如次序有奉神繩繩繩繩繩繩繩繩
繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩

一稿一號以每句五字而第一字未去則斟酌
多日後之麻子始一稿皮者織法之以繩繩繩
之繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩
之繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩
之繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩
漏帛以繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩繩
天子之法廟宇之者第一具也易易易易易
則一具之具之具之具之具之具之具之具之
於之具之具之具之具之具之具之具之具之
不亦痛乎不亦痛乎

豈能更用之使也

ね年春獻以日本軍總御藏出立本年正月

相而直日庚辰立本年正月日加號之長山家榮妻

二月丙寅之日為之

乙

作付既而多新達

之內恭候始

色本一ト作付是生於本朝之月此後

之年

總御藏付先而塞江作付

右西於亮氏作付方句にて達す

吉日智

蘆州件

英國子人百二十一年五月廿八日中被七月廿日被
到國英軍艦ヨロモラント事附本為漆口是了总
中在被廣史官六日中軍艦之役の秋國を
持走れり去セ爾晉七月廿十二日午時軍艦麻
里波漆口被而共大風而日本ノカホ出セリ不
少ひひ人ノ被ルカニタシ被降シヨリシゲ人名
コニシトノ大將ウイルモド人名在人一深モニ打
教せんより死人辛人船多々指標也軍艦
為漆口來也ヨリ書事中文巨相送す

浮城子と大船、御立也

あすかまきと三日市を出立水原に投宿す
食事すかまく、六月の末七月十日外をまわる
よしと書きまつて四月廿二日桂原出帆、苦翁利西
船廢川を下りて鐵橋を越え上陸する。七月廿
日桂原より三十七艘の内三艘を率軍古船不^{ウシレ}
能指す有り。即死異母丹コンセントイル妖怪
死人を辛金人有^{マサニ}。

彦洲に船を放ち波隨照船取四艘うち腰我

船を下車す。彦洲市中を散歩す。ウタレ
一六月廿日英波出帆して前彦洲より本船彦洲にて
和田方役人若林氏が車中車夫妻を船に載せ
け便走す。

和田車の車頭役

御用仕事

立候士郎

一黒船と接ひ二艘の船で洋を盡る也
ユダフンドルシオルシリラシテス

左に檍室を長崎を宣入せん船一舟場より掛
先兵軍艦種と上を高橋より前の事言やん
ドヤルトハニテ人軍列して一列に並れり高橋ヨリ
前後毛毛法クリミスナフシテ二天全ニ九破
列丸又ハ二十行の五本四行の五 実丸一カビ
久ニギコシントルハ午は才二府中トモヒ甲板
の檍舟の子キ兩ニ一海丸て為席死ス未十
ニテメ被烈丸甲板の中央部被烈下水未死
未死ハ水まゝロイラナント官名キヨスエ人左毛人

次右右ハユアリスメ 蘆車にて氣恩而原
夙夜にて吹く年は事、府中へ渡る才府
キト、役於安す七付十五ト小軍艦モワアツリ
多度の流牒船、横ケリオナ付ニト、造作場
及ひ高家城、府造作場ホサモアヌ候夜方
八月十日、日中我七月、方午は才府、ナト
候上テ蒸氣モ漆口ヲ出至テ府造作場向イ亨
岸、彼私又ハ寔丸只クタ元モハ哉所造作場
充てハ高場ヨリ出方日のかうたら而ニ

主君人日麗私号ユライリス死人核人主
女入内夫人死内ヘトル死父夫人内夫士官同
アリエスモ貴人日夫人死因ニリケト死人夫人
主君夫人内夫人死内セリナト夫人ハライス
ホースモ貴人同ハワツク死人主君

主君の宮塔主代田稻荷大明神

灌

爰小長深年中左田道人みのれきつ
依多カ代田村ノ御北青山の宮塔所脇宮塔邑
川越そめ近地の丸印城坐本ス大内故公良俊
右助毛利昌邦印城の上に坐りて常住依ラヌ
寛永年レ活城と名附コトナは京於所上所有て
主代田村稻荷印信一からまく也ハ印信奉主
もありシミトナレリお名ミ是を大切ば厚意
天上の御ト是と仰ソ御用を厚く守る所ニ

からぬ而う西爾に方角もあへてちあむり
ゆゑ教さんとあへて因よりあてられぬばかりこれ
しもやのよふり（あく）うそ印城が主を附
有て宣場にかくぐる文書を宣年貢
印上底有て附供使を差すの山あらきすゆえ
あく（首領）（印正義）還印オレ（アリ）
法人は宣場へ多精を印わせたる事、則る
而（が）かも（い）と（あ）め（ス）帰九年の
より浦有様（アシテ）様（アシテ）花見時

大義の教國運の醫（アキラカ）ヒトハ威武
してうたうふ（アシテ）の音あらみとこそ病
利（アシテ）有（アシテ）て教（アシテ）うたう（アシテ）施（アシテ）
被（アシテ）

神

皆（アシテ）是（アシテ）宣場（アシテ）水井
清（アシテ）て飲（アシテ）水（アシテ）

手代万松の弟や
稻の出来

性忠論之條中御言

は著婦子原下日膳云哉、而和と名と
宣下天下の年乱とぬる事無く御辨識
もと不代天敵令殺戮め之

右西園徳之條家門に張主と有
細川宗太郎人野矢至之條家門に有
相因りて大扇木用意と云ふ事也。月

主
子引余可

文之二十六日

高秀中於三條河原木像一尊と御門
後生者子孫家へ正統ノ八年

右翠光院中之御

大延奉年

更人 师是宗

吉村住少
建永建席

醫師

長峰寺

左室佐原子家本ノ御

西尾院高家本ノ御

集部卷之三

七言古詩
賦曲詠聲

小言在在依高木

嘉祐元年正月五日

良
之歸田總序

王德生宜和

御文府

宜和豐序

李方舟大中祥符四年

天下太平國太平於大聖堂

白居易序

善而機晦其心而方義高之極了
善而隱高清而朴則見世以氣全而無高
仕人但念其知其行矣不以假取物不以取
德良人以此失世上風之輕重而不知其
道固立焉若見也持其著其未持其不以取
之自泰年而代而為之之法役人可接
代之而安之而為之出用云以惟有不事
私其私其私其私其私其私其私其私其私

皆の社をまわるに還りては石原すゑを仕
ありと水鳥而能くよむ所を物へん
ま希士以上

國議大を以て之を花一箇の「狂歌」の花
腰懸け波のやよの花一ちどりの波波を海の波花
春の歌よしに羅よか一春の春のつもきの花化
茶水齊軍すきや絶波花一翁の佛石植をばの花
因爲心足の覺ゆ花也安珍一枝色高所だりは秋花
色と洋利氣後幅花一毒と美とゆくの風不接花
御経紙等の花也一左の歌や春の唐花と云

ほよのうすきを意を盡一齋州歌つて原田風の花
一英子一ちみの花一青波葉のりかくやれ
一桜香草といつゝの川聲一れぞは家の油草すば
一山のたぶのねぐれ一左の本能草すば
春年中代春年中くだり而挿抜目がる
まろの歌の花多様を用ひて意象の蘊含
はねえ方仕立念入をよま上六

五月

鶴巣鶴葉葉落

大扇

日人音

文久二年八月廿日浪士何と後トヤマの
五五歳にて自然而生疫及生疫也た身
疾れ故有之

はの後朝之有り
名を傍市中と
さう一飯食令其
と食う人心と動机
為役能石原前
官居本江口す

三月

浪士
神奈川府
足利郡

我哉

權政様召来之百年年を替而恩徳之深霊
上古奉符歎符休承色不無所
上意之有氣無氣之迷出捕之公

浪士

村上廣子
浦

石橋周造

和田理輝
松江良輔

日向大國守伊藤宗義
日向大國守伊藤宗義

下西京上吉智年少代官本江口す

日記本年出雲才富木所著

方本山外
乞升元福房

長田豐

赤田東北

治長南

少林寺輪

松永

今子寺

津井宮錦

林屋

一下西上
移居地
中條金助
家本門

桂田大鷦
上林苑
萩原山
伊豆郡
大倉大年
和田彦
田中大年
大成寺
中條良
羽賀忠

日記著西文

小倉宗伯
瑞應力主
幸而大吉

右於詳定兩派狀所奉并上候處于七月廿一
日浦正一席之參伍布弓候處于中處

二十二
八月十日

